

映画史

戦前アメリカ映画再考ということ

吉村英夫

1941年12月の日米開戦で、ドイツ映画などを除いて西洋の映画は輸入できなくなる。ジャン・ルノアールの『大いなる幻影』（1938年）が、税関まで来て、映画評論家など少数の者が見て感動したものの、一般公開はできなかった。劇中、エリツヒ・フォン・シュトロハイムが演じるドイツ貴族の末裔を指し、「西洋の武士道」を描いているとして、日本公開の努力をしたようだが、その内容の反戦性からいって、実現は望むべくもなかったろう。

『大いなる幻影』は、フランス映画の傑作である。当時の日本人がジャンのことをオーギュストの息子であることをどれだけ知っていたのか、あるいは印象派の絵画がどれほど日本で評価、普及していたのか私は調べたことがない。「白樺派」が紹介したことで有名ではあるから大正時代から知られていたには違いないが、その程度である。

日本の学生や自覚的映画ファンが、戦前、フランス映画をとりわけ愛した。敗戦後に映画に傾倒することになる私は、戦前のフランス映画を受け入れた日本の知識層の傾向を、もろに受けたことになったのだ、と今にして思う。どうして、

戦前のファンがフランス映画に奔ったのだろうか。萩原朔太郎は、「フランスに行きたしと思えどもフランスはあまりにも遠し」と歌ったが、「花のパリ」は、軍国主義的雰囲気が強まる日本に比して「自由」の雰囲気があり、それを肌で感じたからこそ、文化の華でもあったフランス映画の最上層が形成されたのだろう。ジャック・フェード、ルネ・クレール、ジャン・ルノアール、ジュリアン・デュビエを四天王と称した。とりわけ『望郷』『舞踏会の手帳』のデュビエは、実力以上の評価を受けていたと、現代は総括しており、それはヌーベルバーグ派の評価がそのまま受け入れられているわけであり、私はいささか不満である。だが新しいフランス映画史の試みはないようである。それはともかく、フランス映画の「自由」とともに、1936年に人民戦線が成立し、スペインでも戦闘的なヒューマニズムが勃興したことをどこかで支持したい気分があったからだろうと私は推察している。つまり、「自由」な雰囲気は1931年の満州事変の勃発とともに衰退させられていくなかで、映画ファンは、検閲の目をかいくぐって入ってきたフランス映画を半自覚的に愛したわけであろう。だが、そのことの立証は私には難しすぎる課題である。

さて、戦闘的かつ異端の映画評論家として1960年代に論陣を張った小川徹に『私説・アメリカ映画史』（三一書房 1973年）がある。そこで、小川は仮定の話として、戦前の

映画ファンが、当時のニューデイルの理想主義の方向で映画を撮っていたハリウッド良心派の作品を見ていたとしたら、少しは日本社会のありようも変わっていたかもしれないとも思っている。次のようなことを例示している。フランク・キヤプラの『スミス都へ行く』（39年）『群衆』（41年）及びジョン・フォード『怒りの葡萄』（40年）『わが谷は緑なりき』（41年）のような「ピューリタンのヒューマニズムないしは社会主義」的傾向の作品を見て、それを支持する雰囲気は日本で作ることができたならば、戦中の日本社会の世論傾向も少しは変わったのではないかと。

そんな甘い状況ではなかった。それにここにあげた作品は『スミス都へ行く』が1941年10月15日公開で、奇しくも日米開戦の二か月前で、相当の入りであったとされ、どうして公開が可能だったのか不思議ではあるものの、他の3作品は戦後の公開なのである。

アメリカの民主主義高揚期の作品を、戦前の日本では見ることができなかつたのだから、仮定の話にしても仕方がないのだが、アメリカ映画をとりわけ敗戦直後から意識的に見始めた小川徹の視点は、面白い提起であるように思える。

1930年代フランス映画黄金期のファンである私には、この小川徹の感想は、アメリカ映画が、国家や政治とどう対峙したかを考える糸口をつくってくれているような気がして

ならない。私も視点をフランスからアメリカに移してみなければならぬように思えてきている。…本論のない、未完のメモになったのをお詫びしたい。

